

## 第 18 話 競った仲間がいたから

\*\*\*\*\*

人は人と競争する中で知らず知らずのうちにお互いのよい部分を吸収し、負けまいとしてすばらしい結果を残せることが多くあります。ですから、学習を進める上でも、よきライバル、同じ目的をもつよき仲間の存在はプラスになることは言うまでもありません。そして、このような仲間に恵まれた人は、幸運な人、つまり別の意味での「幸せな人」とあると言えます。

前編から続いたこの「幸せ物語」もこの今回が最後の話ですが、この最終話だけは数学に関連する話ではありません。しかし今までとは別の形で読者の皆さんのお役に立てることを願っています。

\*\*\*\*\*

— 無知であることは、しばしば人を「幸せ」な状態にします。できたと思っても実は全くできていない、でも本人はそれを全く知らない、あるいは勉強が捗っていると思っても実はぜんぜん進んでいない、そんな状態の人を「幸せな人」と定義してきました。もうすぐ、そんな幸せな人の物語が完結します。

るいさんが教室を出て、全速力で廊下を走り出しました。もちろん、どこかを目指しているわけではありません。ただ、3年1組から少しでも遠くに行きたい、離れたいという思いだけがるいさんの頭の中にあるのでした。

るい: みんなで私のことを…、もう知らない…

れい: るい!! 待って!

れいさんは急いで追いかけてしようとしたが、廊下に出たときにはるいさんはもう見える範囲にはいませんでした。少し追いかけてみたが、見当たらないのでれいさんは一端教室に戻ってきました。

そのころ、るいさんは階段を駆け上がり、廊下の角を曲がったところでだれかにぶつかりました。

